

中国文化と南西諸島

窪 徳 忠

大へん大きな題を掲げたが、ここにいう中国文化とは、主に宗教とくに私が専門にしている道教や民俗宗教と、それらに深い関係をもつ習俗とを意味し、南西諸島とは、今日の県名でいえば、沖縄県と鹿児島県の奄美地方を含んだ地域の謂である。奄美地方は、十三世紀中葉から当時の琉球と関係があつたと伝えられている上に、遅くとも十六世紀後半から一六〇九年に薩摩藩の支配下に入るまでの約半世紀足らずの間は、琉球王国の一部となっていた。その後も、沖縄——いわゆる沖縄本島をさす。以下同じ——の中南部と北部のいわゆる山原地方とを往来していた山原船が、以前と同様、冲永良部島・徳之島・奄美大島に出入りしていた。従つて、琉球を通じて多くの中国の宗教文化や習俗が伝えられていたと思われるので、敢えて琉球と一括して考えることにしたのである。なお本日は、沖縄県を琉球、鹿児島県以北の本土地または内地と呼びならわされている地域をヤマトとよぶ。最初にお断りをして、御諒承をえたい。

道教は、学界でもまだその定義が纏っていないが、私は中国古代の民間のさまざまな信仰、とくにアニミスティ

ツクなそれを基盤とし、神仙思想を中心として、易、陰陽、五行、道家、緯書、医学など古代中国に発達した学問に、星占いや巫説（シヤマニズム）を加え、仏教の組織や体裁に倣って纏められた呪術的傾向のつよい宗教で、目的は不老長生を始めとする現世利益であり、開祖の名はわからないと考える。宗教学では開祖の明白な仏教やキリスト教などを創唱宗教、日本の神道のように開祖の不明なものを自然宗教とわかる。道教は老子が説き出したなどともいわれているが、老子を開祖といただいたのは七世紀のことであって、実際の開祖はわからない。だから、道教は自然宗教といわなければならない。

道教はアニミズムが基盤なので、実にさまざまな神がいる上に、他の宗教や民間の崇拜対象まで取入れてしまう。たとえば、観音は慈航道人という神、地藏を酆都大帝という地獄の神としている。だから、一見なんの纏りもないように見られるが、一応大雑把ながら、元始天尊を最高神とし、玉清・上清・太清という三清、玉皇上帝、太乙救苦天尊、西王母以下の神の世界は、ゆるやかなヒエラルキーを形成している。そのうち、現在中国人のあいだで道教の最高神視され、俗に天公とよばれて人気の高いのが玉皇上帝（大帝）である。

1 天公炉  
(台湾、新竹県竹東鎮)



台湾のほとんどの家では、家の入口か正庁の入口に、玉皇のシンボルとされている天公炉（写真1）とよぶ香炉を天井から吊下げて、朝晩線香をたてて拜んでいる。その習俗はシンガポールの華人のあいだにもみられる。

一六六三年に清から冊封使として琉球にきた張学礼の『中山紀略』には、那覇の東北三里に三清殿があり、その東に天妃廟があると記されている。

しかし、一六八三年にきた冊封使汪楫の『使琉球雜録』卷二には、『中山紀略』には三清殿があると記してあるけれども、現在そのような名称の建物はなく、そこは天尊廟とよばれ、殿内にも三清の像はないとみえているから、一時あつた三清像は少時にして取払われたのであろう。天尊とは、正しくは九天応元雷声普化天尊とよぶ雷神で、雷祖ともよばれ、一部の沖縄の人々がいまなお信仰している。その廟は、今日では孔子廟の一隅にある。天妃とは、航海安全を守る女神で、その廟は天尊廟の隣りに現存している。また、一七五六年の冊封副使周煌の『琉球国志略』卷七や、一七一九年の冊封副使徐葆光の『中山伝信録』卷四には「供玉皇」の一句があるから、一時は玉皇上帝像も伝来していたに相違ない。けれども、これまた信仰されなかったために、いつしか取払われてしまったらしい。現在ないことは勿論である。これらの神々の信仰が奄美にみられないことは、いうまでもない。仏教の僧に当るのが道教の道士だが、琉球には道士はいなかったから、これらの神々を祀っていたのは、恐らく僧侶だったであらう。明清時代には、中国は周辺諸国に半独立を認めて自治を許したが、その国王は中国皇帝から公認されない限り、正式の王とは称せなかった。これが冊封制度であり、その認証使が冊封使であつた。周辺諸国が中国に朝貢していたことはいうまでもないが、琉球では冊封使ののる船を冊封船、御冠船、朝貢使の乗船を進貢船、進貢使の帰国を迎えにいく船を接貢船とよんだ。これらの冊封や進貢は、実はそれらに名を借りた貿易であり、一回の人数は数百名にのぼり、滞在はそれぞれ数カ月に及んだ。従つて、これらの人々の往来によつて、中国の文化は当然琉球に流入したに相違ない。

皇帝自身の言動、その周辺に起つた事柄などを史官が記した『大明実録』によれば、明の太祖の洪武二五年（一三九二年）五月に、当時中山、山南、山北三国に分かれていた琉球で、最有力だった中山国王察度が、甥や地方の

豪族の子を、明の国子監、すなわち国立大学に入れて学ばせたとみえている。すでに十四世紀末から、明の国立大学に王族の子弟などを入学させているのだから、上流階級では中国の知識はかなり高い程度だったように思われる。遡って、『宋史』巻四九一流求国の条には、十二世紀の後半に泉州東方の流求国の酋豪が、数百人を率いて突然泉州の村々を襲って殺掠を肆にしたと記してあるから、ときには福建省に侵攻したこともあったらしい。そして、琉球各地から宋の青磁や元の白磁が出土するというから、按司とよばれた各地の豪族が、私的に大陸と貿易をしていたらしい。ごく最近北谷町公文館の玉木順彦君から、具志頭村で春秋戦国時代に現在の河北省東北部にあった燕国の貨幣の明刀銭が出土したと聞いた。明刀銭は、朝鮮半島南部やヤマトの瀬戸内海方面からも出土しているから、時代は不明ながら、琉球人たちはこれらの国の人々と競って、中国と交渉していたことと思われる。従って、琉中の関係はかなり以前に遡るように思われる。

ただし、正式な琉中両国の関係は、一三七二年正月、明の太祖が接待役（行人）の楊載を遣わして建国を告げ、入貢を促したのに応じて、中山国王察度が、楊載の帰国の際に弟の泰期たちを同行させて入貢し、大統曆その他を下賜されたのに始まる。のち、中山国に倣って山南、山北両王も入貢し始めたが、その以前から中山国王には明人が政治顧問としてついていた。一三九二年五月の実録によると、塞官と通訳とを兼ねている二人の明人が、進貢や両国の往来に努力しているから、かれらに職や冠帯を与えてほしい。そうすれば琉球の臣民たちが景仰して「番俗」を変えるであろうという察度の上奏に、太祖が応じたというから、ある時期、明人が中山王支配地の一地区の領主になっていたわけである。そのうちのひとりは一四一一年に帰国しているが、かれらの存在によっても恐らくかなり中国化が進んだことと推測される。

琉球側の伝えでは、一三九二年にいわゆる「三十六姓」が明の太祖から下賜されて琉球に移り住み、その住地を久米村、唐榮とよんだことになっているが、『明史』卷三二三の琉球列伝には、一三九六年に貢使の往来に都合がいのように、太祖が「閩中舟工三十六戸」を下賜したと記されている。けれども、実録には一言もふれていないから、高良倉吉、田名真之両君たちの説の通り、恐らく歴史的事実ではあるまい。諸家の家譜からも、そのように思われる。ただ、この前後のころには、以前から琉球とくに沖繩に移ってきていた福建人がかなりいて、一カ所にまとまって住んでいたことは、恐らく事実であろう。以上のような諸点を総合して、中国の民衆の文化、信仰や習俗が、十四、五世紀以降、琉球とくに沖繩の人々のあいだに知られ、しだいに琉球固有のそれと習合して行われるようになっていたように思われる。以下、私がこれまで各地で見聞したところを少々例示して、説明紹介したいと思う。なお、ごく最近、三十六姓を古く黄河の中・下流域に住んでいて、のち福建、広東地方に移住した客家だと主張する人があらわれたが、あまりに早計な説で、賛成できない。たとえば、客家は三山国王を信仰し、後述の土地神を大伯公というが、三十六姓にはそれらの信仰や呼称が認められないためである。

まず、琉球各地の土地神の信仰から説明したい。琉球では、トーチーケン、トーチーイク、トゥントウク、トコンなど地域によってさまざまによれば、漢字では土帝君、土地君と書く土地神は、『球陽』巻九には、大嶺親方鄭弘良が一六九八年清の都北京に王命で赴いた際に、神像を持帰り、旧小禄村大嶺に祀ったのが最初だとみえている。しかし、人々が中国の土地神信仰を知ったのは、これよりかなり以前のことである。程順則が、自著の『指南広義』で、一六八一年に進貢使たちが、宿舎のあった福建省福州の柔遠駅に建立されている土地神祠で、土地神の誕生日である旧二月二日に供物を献げて祭祠を行なった際の祭文を掲げているためである。神の誕生日とその祭祀

方法とを承知している以上、その信仰内容は熟知していたに相違ない。恐らく、唐榮に移住していた中国人を中心に、かなり多くの琉球の人々が恐らく十五世紀ごろから、中国の土地神信仰の内容を承知し、なかにはその祭祀を始めていた人もいたのではないかと臆測される。

中国で現在、土地公、土地伯公、大伯公などと通称され、正式には福德正神という土地神は、その地区の陰陽両界の守り神という元来の機能を越えて、いかなることでも司り、それを上位の神を経て玉皇上帝に報告するとされている。だから人々は、病気を始め、なにか事が起ると、土地公の小祠に参つて祈願する。また、死人を冥界に案内する神ともされている。その地区関係のことに精通しているとされている点は、新しい村に着いて不明な点があると、すぐに孫悟空がその土地神を呼びだして質問する『西遊記』の記載によって明白である。また商人は毎月二日と十六日に土地神に商売繁昌を祈るが、そのために店内に土地公を祀る場合が多い。その祭祀を做牙というが、とくに旧一月か二月の二日の祀りを頭牙、旧十二月十六日を尾牙と称し、尾牙には以前は店員や得意先まで招待して盛大な宴を開いたが、昨今はすっかり簡略化された。大陸では、中絶しているらしい。

面白いのは、神姿はどこでも同一で、誕生日も旧二月二日とされながら、正体は地区毎に異なり、その地区に功績のあつた人とされていること、生前善行を積んだ人は死後土地公になると信ぜられていることである。台湾高雄市の私の知人は、そのことを私に告げて、一心に善行を積んでいた。また、現世の役人同様、功績や失政があると昇進、左遷され、さらに更迭、転任もあること、三年間身代わりを作らなかつた水死者は土地公になれること、死者生前の行状を調べるなどと信ぜられている。

土地祠は一般に小規模で、なかには一個の石だけのものもあり、祭日に赤布をかけ、人々が参るので漸くそれと

わかるものもある。「田頭田尾土地公」ともいわれているように、田の一隅に石を置いたものもある。それらを含めると、台湾では祠の総数は数千に上るのであろう。私の見た最大の土地廟は台湾屏東車城鎮の福安宮、シンガポールのクス島の大伯公廟などである。人々は、なにか願いのあるとき、旧二月二日、年末年始などに廟参するが、その際には必ず土地公金とよばれる金紙を焼く。琉球流に言えばウチカビである。一般に寺廟に参詣すると、必ずその神仏に適した金紙か銀紙を焼く習慣があるので、寺廟にはそれらをやく金炉、金亭とよばれる特別の炉が造られている。供物は、三牲（鶏、魚、豚肉）である。

神像は主に男神一体（写真2）だが、男女二体の場合もある。女神は、夫が人々を平等に富ませようといった折そんなことをすると娘の嫁入りの際に駕籠を担ぐ人がいなくなるというって反対したといわれ、欲張りで意地悪だとされて人気がない。琉球ではこれまで私の調べたところでは、四六廟あるが、最近屢々神像が盗まれ、残念である。奄美にはこの信仰はない。なお、同じ琉球でも、宮古、八重山方面でいうトートーテン（写真3）はその性格が違い、大地の神（チーヌカン）と考えられ、家や墓造り、井戸堀りなどの際に、供物を供え、願文を奏上して、工



2 土地神像  
(香港、九龍筓湾、天后宮内)



3 土帝君像  
(伊是名村諸見)

事の許可と安全を願う。私は沖縄でも同形式の願文を見かけたから、これが琉球固有の土地神信仰ではないかと考えている。

中国では、原始聚落の中心を表わす社が土地神の起源だと考えられているが、その実体については、石、塚、木、木を束ねたもの、叢などの諸説があつて、はっきりしていない。二、三世紀のころ、城壁に囲まれた町の守護神として、城隍神の信仰が起つた。それに続いて、城壁のない村などの小さな区域の守り神として土地神が案出された。そのために、土地神は城隍神の下位に属する同じ性格の神とされ、さらにその分身として死人や墓を守る后土神が考えられた。ただし、后土神と土地神とは、しばしば混同されている。七三二年に定められた『大唐開元礼』では、卷二九では后土を大地の神と説き、卷一三八以下の葬礼の部では、造墓、埋葬、改葬などの際に、墓域の保護を願う、守墓神とのべている。従つて、后土を守墓神とするようになったのは恐らく七世紀末以降のことであろうが、両者の混同される原因もまた『大唐開元礼』に求められるであろう。

『大唐開元礼』では、墓の予定地がきまるとトか筮で吉凶を占い、吉とすると、中央と四隅に標識をたてるとされているが、現在の福建省では中央に土地神を祀る。ついで、墓左に后土氏の神席を設け、礼拝後祝文を奏上して土地の使用と後難のないことを願う。現在、琉球で「墓左」（墓口に向かつて右）に守墓神がいるとして「ヒジャイ」とよび、墓参の際に先ずそこを拝むことと密接な関係があると考ええる。久米島具志川村の上江洲家小港墓・喜久里家の墓、多良間村平敷屋家の墓などには、「墓左」に凹みがつくつてある。

私が台湾の嘉義県水林郷で埋葬をみた際には、すでに后土の位置がきめられ、煉瓦を置いて表示されていた。しかし、説によれば、台湾・中国・シンガポールなどでは、后土の位置は死者の生年月日、干支、男女によつて左右





#### 4 后土像

(台湾、台中市市営墓地)

が違ふ、水流によつてきめるなどと聞かされた。とにかく、今日では風水師によつて后土の位置がきめられる由である。銭大昕の「后土正名考」によると、墓側に后土のシンボルを設けるようになったのは、十八世紀後半以後だといふ。シンボルに刻む文字は、后土、竜神、福神、来竜、山霊などだが、昨今台湾では、各個の墓側に后土のシンボルを設けることを止め、墓地全体で大きな土地公像を造立する例がしだいにふえつつある。台中市(写真4)、台北県淡水鎮、嘉義県朴子鎮などは、その例である。なお、后土のシンボルは墓の左右双方に造立する場合があるが、伊是名島で清明祭などの折に墓口の左右を拝むことはそのことと無関係だろうか、考えてみたい。香港や東南アジアで、広東省出身の客家は墓の後方に后土のシンボルを造立するときいた。奄美には后土神信仰は見当らなかつたが、長崎市内では墓の左か右に「土神」と刻んだ石を造立する。

風水説では、夫婦の一方が死ぬと、陽は陰を、陰は陽を待つために、夫が死ねば妻を、妻が死ねば夫をよぶので、短期間に二回も葬式をだすおそれがあると称し、それを防ぐために瓦製の符様のものを入れると説き、台湾では今日なお現行している。これに似たものを沖繩や竹富島でみたが、平敷令治教授によると、久米島や西表島でも見られるといふ。私はこれを墓中符とよんでいるが、琉球では台湾と異なつて、現存の人の長生きや子孫繁昌を祈るために墓中に納めるようである。それは、中国と同様の文の他に、「真符千載後。石朽老人来」などの文章が符に加筆されているためである。なお、奄美ではこれまでのところ、墓中符について聞い

たことがない。

風水説関係のことがでたついでに、風水説について一言ふれておきたい。くわしくは、都築晶子龍谷大学教授、故牧尾良海大正大学学長などの論著によって承知して頂きたい。

地理、堪輿などともいう風水説は、中国古代の陰陽、五行、九星、八卦などの説に、二十八宿その他の学説を併せて考案され、人間生活を繁栄させることを目的とする、一種の地相学である。世界の中央に位置する崑崙山上に位置する竜神のところから地脈が各方面に流出しているが、それが竜脈である。竜脈は中国、朝鮮半島、ヤマト、琉球、台湾に及ぶが、各山々から流れて裾野にかかろうとするところに、生気の集まる地点がある。その地点が竜穴で、竜穴に家などの建物、墓、町などをつくと宜しい。その場所は、北に山を負い、その流れが東西に及び、南は開け、東から川が流れている。このような竜穴を探しあてるのが地理師、風水師、琉球でいうフンシーミーである。神棚の下の床面に接して、「土地竜神」、「五方五土竜神」などと刻んだ板がおいてあるのを、台湾や東南アジアの家で見かけるが、そこが竜穴に当る意味の表示である。私は、台湾の内政部長になった人は、その祖先の墓が吉相のためだとか、広東省梅州市では他人の墓の背後にうっかり墓を造ると、竜脈を切ったとして流血の惨事が起ることがあるなどと聞かされた。中国の人々が風水説を重視している好適例となろう。墓中符に「来竜」と記すのは、その場所に竜脈がきているとの意味を表している。そして吉方をみる道具が羅盤である。

琉球では、王府がわざわざ人を福建省に派遣して風水説を学ばせたほど、重視していた。現在の那覇市天妃町の大道は竜の身体に当るとして尊重されたが、村が栄えないと、フンシーミーが悪いとして、フンシーミーに意見を聞いて移転した場合がかなり多い。また、東風平村の丘の上に造られた石造の獅子、いわゆるシーサー、墓の方向や位置、

屋根の斜面にのせる屋根獅子像、石敢当などは、すべてフンシーミーの指示に従って造るのが原則だった。なかには、屋敷の中に風水の神を祀っている家も少なくない。

琉球でイシガントウと呼び慣わされている石敢当は、十世紀ごろの中国の勇士の名だと信じている人々が大半だが、それは文章の誤読で、勇士の名は石敢である。『輿地紀勝』巻一三五によれば、中国最古の石敢当は、福建省莆田県の県知事が県内の官民の平安、県の発展、除災招福を祈る目的で造立されたものである。また、現存最古の石敢当は、十二世紀中葉に現福州市の一仏教信者が亡父母の天国への再生を願って造立したもので、福州市外の于山にある。それが、十四世紀ごろになると、直線的に進む邪気を避けるものとされるようになった。そのように指導したのは、恐らく風水師だったように推測される。以前は、無字の石をおく場合もあったが、獅子が強力なことから、石造の獅子を造立する場合もあったらしい。福建省の金門島では、石造の獅子の立像を置いて風砂を防ぐが、アモイでは獅子と結びついた石敢当がある。力の強い人などの説は、そんなこととも関係があるろう。琉球にも獅子と結びついた石敢当があるが、いまや石敢当ブームともいうべく、プラスチック製から既製品まで広く出廻っている。奄美には石当散、石散当などの誤刻や、九字を附刻した木製品もある。石敢当はヤマトにも広まり、各地にみられるが、裏日本には少ない。ただ、秋田や弘前にはみられ、最北端は函館である。なお、九字とは、中国の神仙説で説く悪鬼、悪霊を避ける呪術で、臨、兵以下九個の字を口で誦えつつ、右手の人差指と中指を手刀として、空中に縦四、横五の線を横縦横の順でかく。九字は、仏教や修験道に取り入れられてヤマトに伝ったが、琉球ではまだきいたことがない。

風水説関係の器材の一つに物差しがある。中国では陽用の文公尺と陰用の丁蘭尺があり、前者には財、病、離、

義、官、劫、害、本(吉)の八字が、後者は丁、害、旺、苦、義、官、死、興、失、財の十字が、それぞれ刻まれていて、計測の際には凶字をさげ吉字に当るようにする。前者は約四三センチ、後者は約三九センチで、すべてを計測するが、琉球では文公尺のみを容れてカラ尺、カラジョーとよび、多くは門の幅、墓口、仏壇の高さなどを計る。これはヤマトにもあり、カラ尺、唐尺とよぶから、カラ尺という称呼はヤマトからの伝来らしい。今日ではバンジョウガネの長い部分に刻まれている。奄美にはないといわれていたが、私は徳之島で見ることができた。大島、加計呂麻島には「八繩の法」が残っているが、唐尺と無関係ではなからう。

ところで、現在最もひろく琉球の人々のあいだで信ぜられているのは、ウミチムン、オハマ、ヒヌカン、ピナカン、ウカマガナシ、ヤーヌカム、ダヌカムその他、各地でさまざまにやばれている火神の信仰であろう。中国には灶君爺、灶君公というカマドの神があり、正式には司命灶君、定福灶君とよばれている(写真5)。Fustel de Coulanges の“La Cité Antique”の第一篇第三章によれば、ギリシアやローマ、古代インドにも火や竈の神があり、家や家族を守り、他神と人間とを仲介する神として、人々から篤い信仰をうけていたというが、その点は中国でも大体

同様であった。

私は、火に対する畏怖や信仰に基づき、その火をたく場所としての竈への信仰に発展したと考えている。『論語』八佾篇に「与其媚於奥。寧媚於竈」という一句が記されているから、少なくとも孔子在世時代の前五世紀に、すでに竈が神性を持つていたことは明らかである。その結果、いわゆる竈神とい



5 竈神図  
(台湾、屏東県東寧村)

う神が考案されたのであろう。なお、火はその後火神として独立の性格を保ち、『玉匣記通書広集』巻下によれば南方火神として信仰され、誕生日とされている旧六月二十三日には、関係の廟に参る人々が多い。台湾台南市の法華寺には火徳真君としてその像が祀られ、その水を火難除け呪いに受ける習俗が現行されている。一方、竈神の名は張福德、張単などと伝えられ、誕生日は旧八月三日とされている。

二世紀に纏められた『淮南万畢術』には、竈神は古くから平素一家の人々の言動を看視し、その悪行を天神に告げる司過神の一種と記されているが、恐らく当時の人々の考えの反映に相違ない。下って、九世紀の『甫里先生文集』巻一八には、人間の善悪双方の言動を記録して天神に上奏したとあり、十七世紀中葉の『太上宝筏図説』には、竈神が善行を上奏した結果、その二子は科挙に及第し、夫婦は長生きをして孫の顔のみたという話が記されている。子が科挙に合格し、夫婦揃って長生きすることは、十九世紀以前の中国の人々にとっては、多大の幸福視されていた。竈神のこのような機能は、いまなお信ぜられているので、竈神に対する人々の信仰は依然として深い。数年前、山東省の一模範村で、文化大革命中にも、表の門を閉じて家内で秘かに竈神を祀っていたと聞かされたのは、その好適例となるろう。

『後漢書』卷六二の陰識伝には、祖父陰子方が前一世紀の前半に、旧十二月八日に朝炊事中に竈神が現われたので供物をして祀ったところ、大金持になり、子孫は繁栄したと記されているから、当時は十二月八日に祀ったらしい。二、三世紀には、一部で七夕に祀る家もあったが、一般には毎月晦日に祀ったと思われる。十世紀以降、江北では十二月二十三日、江南では十二月二十四日に天に上るといわれたので、それぞれその日に祀ったようだが、数年前福建省泉州で尋ねた家では、十二月二十三日晩方祀ったと告げたから、近年は江南でも二十四日と決まってい

るわけではないらしい。香港九竜の錦田村では、神は帳面を持って上天すると告げた人がいた。一部の琉球の人々の伝承と一致していて、興味がふかい。

下天日は、現在でも以前と同様、大晦日、元旦と考えるのが一般的ながら、台湾、福建、広東の多くの人々は旧一月四日という。なお、上天日を送神、下天日を接神とよぶが、台湾では上天日には電神が他の多くの神々とともに上天し、その翌日、玉皇もしくは玉皇の命を受けた神が、電神の報告の当否を確かめに下天するとも伝えている。なお、この他朝夕線香を供えて簡単に拝むことは、もちろんである。

供物は、古くは酒と豚肉ぐらいだったが、十世紀以後には豚頭、豆、魚、紙製の車馬となり、金紙を焼いた。前二世紀ごろまでは老婆が、その後とくに十世紀以後には主人が、悪いこともしたろうが、それは告げず、善いことのみを告げてほしいと願い、下天の際には幸福や利益を持ってきてくれて有難いとのべた。北京附近では「男不拝月。女不祀竈」というが、四川省成都では女性に加わり、前述の泉州の家では娘が祀っていたから、必ずしも祀る人は男性のみとは限らない。なお、清代には、神の絵像の唇に鮠をぬり、竈に酒糟をぬったりして、悪事を告げさせないようにしたというが、現在ではしない。

悪事を天帝に報告されると困るので、竈前のタブーははなはだ多い。少々例をあげると、女性が竈をまたぎ、竈に腰をかけること、竈前で罵詈雑言をいい、吐鳴り、泣き、子供を叱ること、吟詠し、竈を叩き、竈上に汚れ物や刃物をおくこと、夫婦喧嘩、用便をし、裸になること、字紙や汚れた薪をたくことその他であるが、ほとんどが女性についてである。御利益は長生、繁栄、災難除け、金儲けなど各般に及んでいるから、昨今の電神は司過神から守り神に変容したようで、一家の主とさえいう人々もいる。従って、一般の家庭ばかりでなく、寺廟・ホテル・食



7 ヒヌカン  
(北谷村吉原、某本家床の間)



6 定福灶君  
(シンガポール、  
コックピットホテル炊事場)

堂の炊事場でも祀るが、定福灶君、司命灶君と記した板か絵像が多く、神像はほとんどない(写真6)。なお、家庭では炊事場でなく、正庁に祀られている場合が多い。

琉球のウミチムンは三石を鼎型に置いた原初的竈から、オハマは釜または鼎から思いつかれた称呼だろうが、ヒヌカンという称呼から「火」の信仰が基盤になっていることが明白であろう。また、ダヌカムやヤーヌカムは「家の神」の意味だから、中国の「一家の主」と共通して注目を惹く(写真7)。私はこれらの称呼から、琉球でも火の信仰から火をたく場所としての竈を神聖視して、竈神信仰が起つたと考える。そして、初期には鼎型においた三石その物を神体とし、ヤマト式竈を作るようになると、その竈を神体としたのであろう。それは、現在でも、最大の竈を神体とみ、もしくは以前から竈後に香炉をおいたという伝承から確かめられる。ただし今日では、三石のシンボルか香炉を炊事場において神のよりしろとしている。なお、太陽や祖先崇拜から竈神信仰が起つたとみる説があるが、賛成しがたい。その説で説く東方聖地説のニライカナイは、中国の神仙思想、五行説を考慮に入れる必要があるのではないかと考えるが、いかがであろうか。また、従来神体の三石は海、野原、川から取る

といわれていたが、どこからでも取ってきていたのが実際である。

人々は、ヒヌカンの名、数、性別、誕生日などについてはほとんど無関心で、かりに神は三人とのべても、それは三石からの連想にすぎず、女性が祀るから竈神は女神と称する場合が大半である。けれども、与那国島で男神とする話を教えられたし、専門家によると同じ筋の話はかなり広い範囲に分布している由である。なお、久米島、石垣市や竹富島の一部では、三石のそれぞれに名があるといい、石垣市川平では旧家七戸に限って、その家の始祖名をヒヌカン名とする。その理由についてはいまに未解決である。『八重山島大阿母由来記』ではオタイカネを竈神名とする。

元来琉球では、ヒヌカンが上天するなどとはいわなかったはずであり、現に上天などはしないとのべた人々もいたけれども、大部分の人々は上天すると告げた。ことに宮古の池間島と城辺町保良とでは、台湾同様、十二月二十四日にすべての神が上天するとのべたが、保良ではカムカカリヤまで同様にいったので、琉球のカマド神信仰にはユタ的職能者が相当程度関与しているように思われる。現に多良間島では一部の人がユタの指導に従って信仰していた。その関係のためか否かは明白でないが、同島では以前は棟上げの際に、ファパスとよぶ縄梯子を作って垂木から竈の予定地に向けて下げ、頭梁が供物を供えて、「ヤヌカムガナシ、下りてきて下さい」と祈った。この話を聞いた帰途、偶然建築中の家の脇を通ったので大工に尋ねたが、知らなかったから、現行はされていない。しかし右の習俗から、多くの人はヒヌカンはニライカナイにいるなどとは思わず、単に天上にいると考えているらしいことが推し測られる。

王国時代には、いまの市町村役場に当る蔵元や番所の敷地内には、ヒヌカン祠が置かれていた。宮古島の多良間





8 ヒヌカン  
〔多良間村役場〕

国際大学南島文化研究所の調査報告書によつて承知して頂きたい。

奄美については文献資料が乏しい関係で、以前のことがよくわからないので、ここでは私の調査した範囲内でごく簡単に紹介したい。くわしいことは、恐縮ながら近く発表する報告書によつて承知して頂きたい。

神名は、与論島ではフィヌカンと琉球に類似し、沖永良部島はウワーマガナシで統一されているのに対して、徳之島はウカマガナシ、ヒノカミ、ジルンカミとわかれ、他島とくに喜界島では実に雑多で、同一集落内でさえ異称が多いが、ここでは瀬戸内町でヒニヤハムガナシ、ジリユンカミ、大島ではカマドンガミ、ユルイノカミ、喜界島ではシオンニヤラシ、トゥンガラシなどが比較的多いことを紹介するに止めておく。

神体は、古くは琉球同様の鼎型に置いた三石の竈そのもので、与論島ではペアンジヤナシとよぶ。ヤマト式竈に

村役場には、現在までその伝統が引継がれて、その炊事場の一角に香炉が置かれ(写真8)、年末年始には村長以下の人々が拝む。とくに元旦の礼拝は「ウイヌウダミ」とよばれている。この行事は、王国時代には時の王の誕生日と同一千支の年初の日に、王の健康幸福を願つたが、廃藩後は天皇のそれを元旦に、第二次大戦後は島民の健康豊作を祈るよう変つて、今日に及んでいる。また同村の中学では、ヤヌカムを用務員室に奉安してからは、生徒の怪我がなくなったという。他にはそのような類例をみないから、同村の人々は大へん信仰が深いといわなければならない。この他、同村には注目すべき関係の信仰、伝承、習俗があるが、時間の関係で、沖縄

なると、焚口の両側に火吹竹などで以前の形を刻したが、その名残りが徳之島や加計呂麻島に現存し、カマンツラなどとよぶ。徳之島伊仙町では神のよりしろとして置く三石をネンマンとよび、喜界島では長方形の紙を挟んだ竹の上部に米団子をつけて、よりしろとする。これらのよりしろは、居間と炊事場兼用のトイグラ内に作られたジル、ジリヨとよぶイロリ様の場所の一隅に安置する場合が多い。そこに竈があるためだが、ジルンカミとよぶのはそのためであろう。なお、ヒノカミなどの名称が示すように、琉球同様、奄美でも、火の神信仰が起源であろう。しかし、奄美ではその性格が琉球より一層強く、外出時に火事にならないように願う人が多い。なお、瀬戸内町の一部では祖先と同一視してウチガミサマとよぶ。

神名とその誕生日は、全然知らない。神数は、喜界島で三人という以外、やはり不明である。性別は、琉球同様の理由で女性とする。竈神の上天説については、加計呂麻島の佐知克で『大雑書』により、大島の笠利町と名音で『日柄吉凶控』によって、中国とはいささか異なる形式のそれを承知している二、三の例があった以外は、知らなかった。尤も、知名町田皆で一日三回上天するとのべた人がいたが、論拠は不明である。不審なことに、奄美地方を通じて共通する祭祀日がない。たとえば、与論島の一部では旧十二月二十四日、大島の宇検村名柄では旧九月庚午日というように、場所によって異なる。徳之島では、月待の際に祀る場合が多い。しかも、加計呂麻島以外は毎日拝むところが少ない。老婆か嫁が拝むのが原則ながら、ユタに任せ放しのところもある。結婚その他、家としての祝いにも拝まないが、加計呂麻島では主人夫婦が、他の二、三の島では主婦が、それぞれ死ぬと、よりしろか竈その物をこわして新造する。それにも拘らず、「一家の主」とは考えていない。御利益は、家内安全、子孫繁栄、魔除けだが、火の用心が普遍的である。ただ、タブーが琉球とほとんど同様なことは、他の諸点が以上紹介し

たようにならり相違しているのに対して、いかにも合点がいかない。

さて、先刻ふれたように那覇の天尊廟の隣には天妃宮がある。天妃とは、十世紀に福建省莆田県地方に起つた海上安全の守り神の媽祖に対して、モンゴル朝の世祖フビライが一二七八年に下賜した封号で、正式には天上聖母という。同地方には船乗りが多く、しかも海外に移住する人々もいたので、それらの人々のいく先々に媽祖の信仰が拡まったが、船員たちは十五世紀ごろからその神像を船に乗せるようになった結果、ハワイから東南アジアにかけての地方に及んだ。けれども、琉球では、那覇に二字、久米島に一字の媽祖廟が造立されたにすぎず、宮古、八重山、さらには奄美にもその信仰が見あたらぬ。ところが、ヤマトでは、長崎市、平戸市、鹿児島県、大阪市、箱根、茨城県から下北半島の北端の大間町にまで、その寺廟が建立されている。いまの私には、その解釈がつかかぬている。台湾には五百以上の媽祖廟があり、人々のあつい信仰を集めている。

那覇の天尊廟内には、三国時代に活躍した関羽が陪祀されている。関羽は、清軍が明朝に対して挙兵した際に清軍を助けたというところから、清朝時代には忠義武勇の神として関聖帝君と名づけられ、全国的にその廟が建立されて、広くあつい信仰をうけたが、今日ではむしろ金儲けの神、寺院の守り神として人々の信仰を集めている。けれども琉球では、沖縄の一部で門中の神とされているのみで、宮古、八重山では、奄美地方同様信仰されていない。つぎに、簡単に中国的習俗にふれておこう。さきに紹介した石敢当同様、屋敷内に悪鬼、悪霊が入り込むのを防ぐのが影壁と門神である。一九四二年に始めて北京を訪れた際、ある家で大門を入ったところ、三方が囲まれている、突当りに頑丈な壁があり、正面は見えない。止むなく右手に造られている小門をくぐって入ったが、その壁が影壁である。一般的には、家の正面前の方に土製か石造の壁がおかれている。福建省では屏風というが、台湾で

は日本政府が撤去させたためにほとんどない。バリ島で玄関前に灌木を十本程植えてあるのを見た。屏風の訛ったのが琉球のヒンプン、ピンポンであろうが、なかには石造の立派なもの、瓦とコンクリートを交互に重ねた手の混んだ作りもあるが、板を数枚並べて打付けた簡単なものもある。人々は、外から見えぬためという場合が多いが、奄美でも同様という。なお、中国では寺廟の前に建てたものは照牆というのがふつうである。

前一世紀の中葉、武人成慶の姿を門扉に画いたのが門神の先縦で、六世紀中葉ごろからは神茶・鬘墨を、八世紀ごろからは他に秦叔宝・尉遲敬徳を、それぞれ画くようになり、今日に及んでいる。この他に、加冠・晋禄や晋爵・

簪花を画く場合もあり、前二者を武門神、後二者を文門神とよぶが、

前者は魔除け、後者は招福が目的である。門神は琉球では流行病や厄よけのために行われたが、いまでは奄美同様ほとんど見当らない。上

棟式に棟木に天官賜福紫微巒駕と墨書する習俗(写真9)は、現代中国では不明ながら、広東や台湾では以前は書いたと聞いた。天官が幸福を下だし、北極星が下天して家を守ってほしい旨の願文だが、琉球ではシビランカンとよんでいる。奄美でも現行されている。中国には文字は聖人が書いたとして、文字を記した紙を尊重し、踏んだり粗略には扱わない習俗があった。これを惜字紙といい、道に落ちていると拾い集めて、「惜字亭」、「字炉」などという特別の炉で焼いた。台湾の有志は、いまでも人を雇って字紙を集めている。琉球では、冊封使の



9 天官賜福紫微巒駕  
(石垣市川平)



10 焚字炉  
(沖縄、玉城村百名)

勸めに従って王府が命じて焚字炉を造った。その一つが完全な形で、玉城村百名に現存している（写真10）。奄美ではまだ見つけていない。以上、きわめて大雑把に南西諸島の中国的宗教文化と習俗とを、これまで私が承知した範囲内で紹介した。従来私は、これらの文化や習俗は、すべて中国から直接南西諸島に伝来したかのごとく考えて、そのようにのべてきた。けれども、昨九四年十月、江戸時代に徳之島を含むヤマトで広くかつ盛んに行われていた庚申信仰関係の文献資料を、石垣市立八重山博物館で見つけた。庚申信仰とは、庚申日ごとに徹夜をして長生きを願う、中国に発してヤマトに伝来して、ヤマト化した信仰習俗である。以前、この習俗が徳之島に行われていたことから推して、ヤマト經由で琉球に伝えられた他の中国的信仰や習俗もあるのではないかと考えるようになった。今後は、この方面からの考究も必要だと考える。また、一度伝来しながら中絶した信仰や習俗もある。前に紹介した三清・玉皇の信仰、および扶乩（フーチー）とよぶ信仰習俗はその一例だが、そのような面にも注意を払う必要がある。さらに、琉球に濃く、奄美に薄い信仰や習俗の存在は、薩摩藩が奄美の中国色を消滅させ、琉球で温存させた表われではないかと考えるが、いかがであろうか、御教示をえたい。時間の関係で急いだったのでおわかりにくかったと思うので、スライドによって話の不備だった点を補足させて頂きたい。

（東京大学名誉教授）